

日野キャンパス ― 孝とわたしと、時々、式部 ―

石 渡 佐 季 子

実践女子大学に入學してから卒業するまでの四年間、わたしのキャンパスライフは「横井孝」を中心に回っていたと言っても過言ではない、かもしれない。思う存分に楽しんだ大学生活の中で、とりわけ横井先生の影響が大きかったことは間違いないのである。

先生との出会いは入学時、当時のクラスの担任教授だったことによる。

「えー、担任の横井です」

先生のその一言からわたしの運命は始まった。当時はまだ、先生の声がとても耳に心地よいというだけだったのだが、とにかく「第一印象から決めていました」、まさしくこれである。こうして大学一年生の春、わたしは「四年間で横井先生の講義や演習は全て履修しよう」と決意したの

であった。

今でも、教室の中央最前列を友人たちと陣取り、横井先生を見上げながら講義を受けていた日々を思い出すと、懐かしさに頬が緩む。

先生の講義で一番印象に残っているのは、国文学概論のレジュメに登場した「国文学（くにふみ まなぶ）くん」と「概論（おおむね さとし）くん」である。まさか、講義名の擬人化キャラクターが登場するとは思っていなかったもので、なかなか衝撃的だった。レジュメは大抵、この二人（時々、三人）の対話で構成されており、読み物としても楽しむことができた。ゆるいボケと典型的なツッコミでやりとりする中で、わりと真面目に文学について語り合うこの二人。それを先生が考えて作成しているのだと想

像すると、思わずにやけてしまふのだった。講義中、「先生としては、ここでクスツと笑って欲しいのだらうな」という箇所でも笑わなかったりと、苦笑いで自らギャグを解説なさる姿もおもしろかった。いとをかしである。

国文学概論の講義でもう一つ印象的だったのは、期末試験だ。小説の一部を引用し、推理する内容で、わたしはそこで初めて「バタフライ効果」なる言葉を知った。今でも印象強く記憶に残っており、ふとした時に思い出すのだが、今のところわたしの生活の中で「バタフライ効果」を実感することは無いし、言葉として使用する機会も無い。全くもって残念なことである。いつの日か渾身の得意顔で、「これ知ってる！横井先生の国文学概論でやった！」と言いたいのものだ。

そうして、二年生になり、横井先生から文芸資料研究所（以下、文芸）でのアルバイトのお誘いをいただいた。仲の良い友人も声をかけられていたこともあって、二つ返事でお引き受けた。この文芸での経験はとても貴重なものであったし、先生との思い出はゼミよりも多く残っている。なかでも、平成23年に行われた展覧会『源氏物語の転生——さまざまな形と姿をもとめて——』の準備が懐かしい。キャプションやパネルを作成したのだが、先生に「よし」と言ってもらうために何通りものデザインを考えた。文芸

アルバイトの仲間たちと取り組んだこの作業は、普段の仕事とは全く異なっていて新鮮でおもしろかったし、「横井先生はこれが好きそう！」と想像して皆で案を出し合うのは、純粹にとっても楽しかった。先生もご多忙の中、度々文芸にいらっしゃって、わたしたちの作業状況を見ては「このパネル、少し曲がっている」「デザインはいいけど、フォントがいまいち」と、にやりと笑いながらも細かく確認して指示をくださった。また、展示する絵巻物や古筆切などもあり実際に見せていただいた。時代を越えてもお彩り豊かで美しい絵巻たちを、ガラス越しではなく間近で見ることができたのは、文芸でアルバイトしていたからこそ経験であった。

また、アルバイト後に横井先生と帰路を一緒に過ごさせていただく機会も度々あり、そうした時は電車の中でわたしのくだらない話にお付き合いいただいたものだった。いつだったか、何気なく父親の全裸話をしたところ、大爆笑なあって、車内で注目の的になったことがあった。まさかそんなに笑われるとは想像していなかったので相当恥ずかしかったのだが、声を上げて笑う先生の姿を拝見できたのは儲け物だったなと、今では満足している。卒業後、母校を訪ねた際にも「全裸のお父さんは元気にしているか」と聞かれ、忘れかけていたあの日の羞恥心を呼び起こされた。

父には少し申し訳ない気持ちもするが、それだけ強く横井先生の記憶に残していただいたということだから、大勝利といえなくもない。恥ずかしので、そういうことにしている。

横井先生の授業は、講義の課題レポート・演習・ゼミ、どれも自由度の高いものだった。課題レポートや演習発表の資料作りは、その自由度を楽しんで友人と試行錯誤を詰め込んだ。特に基礎演習では、「レジュメは、簡潔に、わかりやすいものを」「発表は、『レジュメの音読』ではなく、レジュメの補足を含める」と教わり、それは他の演習においても意識するようにしていたし、教育実習や社会人になってから活かすことができた。やるなら、おもしろいものを作成したい……そう思って、演習の資料に漫画のページを引用したり、友人と合同でオリジナルの紫式部漫画を描いて小冊子を作成したりと、自分たちの趣味を遺憾無く発揮した。調査も、友人との意見交換も、演習発表に向けた準備の全てが楽しかった。入学した時に先生が仰っていた「学びを楽しむ」とは、こういうことなのかなと感じた。

自由である分、ゼミにおいては特に自主性と根気が要求された。中間発表などのゼミ内で設定された経過目標がないので、すべて自分で計画的に進めていく必要があった。

先生は「些細なことでもいいから、気軽に報告相談しに来るように」とおっしゃっていたのだが、卒論のテーマ自体が迷走していたわたしは、なかなか報告に行くことができなかった。最終的に、卒論は自分史上五本の指に入るだろう黒歴史となつて終わったわけだが、こうした苦い思い出も含めて、卒論ゼミはいい教訓だった。猪突猛進だけが最善ではないということ。先行文献の有り難さ。そして何より、作成データのバックアップは必ず複数に小まめにする。こと。パソコンはいつか壊れるし、いつ壊れるかは分からないのだ。最後の教訓はつい最近も失敗したばかりなので、非常に頭が痛い。

横井先生から学んだことは多く、わたしの中に根付いているはずなのだが、ふと思ひ出すのは本当になんでもない会話や取り留めもないことばかりだ。

例えば、先生の言葉で最も印象に残っているのは、「原稿は、書き上げた時が締め切り」という一言である。当時、先生は出版予定の御著書を執筆なさっていて、その時点で一ヶ月以上締め切りを破っていらしたそうだった。わたしが「それはさすがにまずいのでは」とお尋ねすると、先生は悪びれる風もなく、ゆつたりと椅子の背もたれに身を預け、それこそ帝の如き優雅さで、先の言葉を宣うたのであ

る。(先生は、学生の間で密かに「帝」と呼ばれていた。) わたしはその姿に、ただただ、「なるほど、これが帝の威厳か……」と圧倒されたのであった。わたしなど、いかにして印刷所に迷惑をかけず、早割で不備なく入稿するかで必死になっているのに、さすが横井先生、格が違う。

以上、継ぎ接ぎのような文になってしまったが、結局何が言いたかったのかというと、「わたしは、横井先生が大好き」ということだ。

この三月でご退職とのことで、先生が母校にいらっしやらなくなるのは寂しい限りだ。しかし、日野キャンパスで過ごしたあの日々を忘れない限り、わたしの心が横井先生から離れることはない。わたしはきつと、ふとした瞬間に先生とご一緒した日野の、急でもなく決して緩やかでもない線路沿いの坂道を思い出すことだろう。カレーを作っている最中に、先生が玉葱嫌いだったことを思い出しながら、容赦なく玉葱を投入することだろう。紫式部関連のものを目にした際に、書店やインターネットで先生の著書を検索することだろう。電車の中で、父の恥ずかしい話をして先生に爆笑された日のことを思い出し、頭を抱えることだろう。あの頃の横井先生との些細なやり取りが、わたしにとっては花が咲くような鮮やかさで記憶に残り続けているのである。

(平成二十四年度 卒業生)



ゼミ旅行にて。下段左から三番目が石渡